

# タイラー・エヴァンズの *Over* を批判する

加藤 鉦三・花崎 美紀

**Key Words** ; Tyler & Evans, *over*, 前置詞, 副詞, 多義

## 1. はじめに

前置詞の本格的な意味論研究は Brugman (1981) に始まったと言ってもよいかもしれない。それは *over* の意味について考察であった。*Over* の意味論研究はその後様々な議論が行われるが (例: Dewell (1994)), 最近では Tyler and Evans (2001, 2003) が詳しい考察を行っている。しかしながら, これらの先行研究の多くは, Hanazaki (2005) が指摘するように, *over* の意味論と称しながらも実際には *over* を含む節全体の意味記述である。タイラー・エヴァンズ (以下, T&E) はその中でも, *over* のみの意味論を扱おうとしているという点においては評価されようが, 本稿では彼女らの *over* の扱いを批判的に検討する。その上で副詞としての *over* の意味論についての提案を行う。

## 2. Proto-scene (原図形) と独立義

T&E は, *over* の中核, 彼女らの用語では proto-scene (原図形) (Figure 1) を, 「心理的に手の届く範囲内での上」と設定している。その proto-scene は彼女らの 7 つにもものぼる原図形の決め方に沿って求められているが, その求め方については, ここでは触れない。

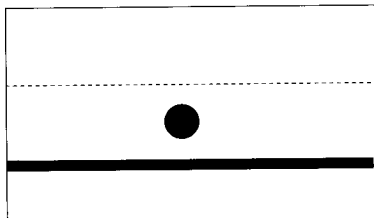


FIGURE 1: Proto-scene of *Over*  
(T & E 2003: 88)

そして, 具体的な諸用法である独立義はその proto-scene から導かれる。独立義について, T&E は次のように述べる: 「我々の方法論によれば, ある意義が独立義であると見なされるのは, その解釈の手掛かりとなる文脈的情報とは独立してその読みが生じる場合に限られる (p.76)」。例えば, (1) のような文における *over* は, proto-scene の意味で説明出来るとしている。

(1) The cat jumped over the wall

(T & E 2003: 69)

そして, これが proto-scene から導き出される方法は以下の (2a-d) である。

(2) (1)が FIGURE 1の proto-scene から導き出される方法

- (a) 動詞がスタート地点ないしは跳び上がる地点としてAを指定している
- (b) トrajekターは空中にとどまっていることができず、必ず地面に降りてく
- (c) ランドマークは前方への移動の障害物として解釈される
- (d) 空間配置のカギを示す語として *over* が使われている

つまり、*jump* は飛び上がる地点としてある地点を指定し (2a), *cat* は飛び上がれば必ず落ちてこなくてはならなく (2b), *wall* は飛び越えられるものとして解釈される (2c) などの、言語上コンテキスト情報から、(1)は「飛び越える」という意味に解釈されるわけであり、(1)の *over* は、「その解釈の手掛かりとなる文脈的情報とは独立して」飛び越えるという読みが生じているわけではないので、これは独立義としては認められないのである (2d)。

そして、Figure 2はT&Eの設定する *over* の意味ネットワークである<sup>1</sup>。

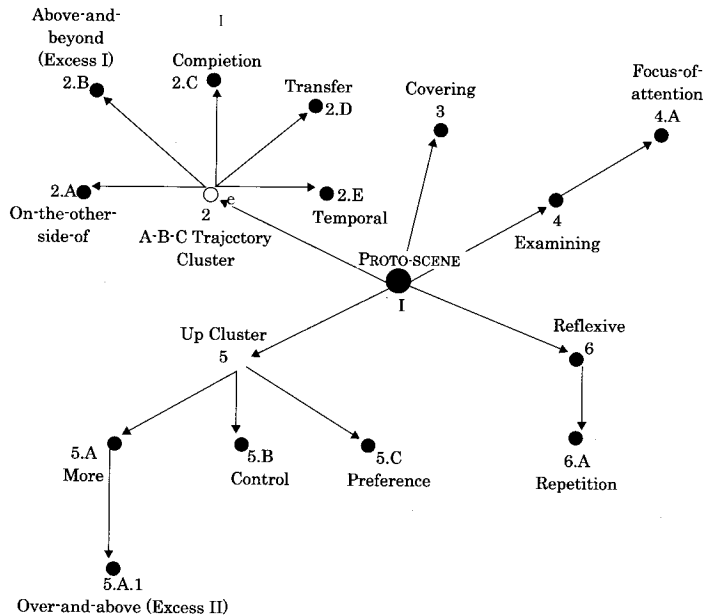


FIGURE 2: The Semantic Network for *Over*

(T & E 2003 : 80)

では、以下、T&Eの設定する独立義について見ていく。

## 2.1 <反対側>義

T&Eは、(3)を<反対側>義であると論じ、それが独立義であるのは、*over*の意味が proto-scene の意味、すなわち<above+near>であるとするなら、(3)の意味は導き出せないため ((3')), (3)の *over* は、proto-scene とは独立した意味として認めないといけないと

<sup>1</sup> 本稿では、このうち<被覆>義、<注意の焦点>義、<優先>義は、特にコメントすることがないため扱わない。<多量超過 (超過II)>義は、それだけを対象にした別稿を準備中であり、やはりここでは論じない。

している。(以下、T & Eからの例文の後には原典の例文番号を付す)

(3) Arlington is over the Potomac River from Georgetown. (4.20)

(3') \*Arlington is <above+near> the Potomac River from Georgetown

しかしながら、T & Eのこの論理は、改善の必要性があるであろう。(3)の *over* が<反対側>を意味することは文脈から導くことができないとしているのだが、それには注釈(4)が必要である。

(4) T & Eの独立義設定の論理に必要な注釈

T & Eが文脈から導くことができないと言う場合、

- (a) それはT & Eの原図形から導くことができない、という意味においてのみ有効であり、
- (b) T & Eのその仮定を外せば、それぞれの *over* の意味は文脈から完全に導かれる

T & Eは、徹底して proto-scene を空間的な視点から捉えようとしているが、その空間へのこだわり、*over* の例で言えば「上」へのこだわりが間違っていると本稿は主張する。例えば、(3)において、動詞 be は存在ひいては位置を表すので、「上」という proto-scene からは、(3)の意味は導き出しようがない。(3)の *over* の意味は、文脈が完全なキューとして機能している。それにも関わらずT & Eが(3)の *over* の意味が文脈からは導かれまいと考えるのは、T & Eの主張する (2a)-(2e)、すなわち「手の届く範囲内の上」という原図形を経由しては(3)が導かれまいからである。それは、(3)の解釈に垂直方向が含まれまいからである。T & Eの原図形設定を考慮に入れれば(3)は導かれまい。

この問題は、加藤・花崎 (2006) のように、*over* の意味を(5)のように規定し、(3)を(6)のように説明すれば、解決出来るであろう。

(5) 加藤・花崎 (2006) の *over* の意味設定

X over Y の意味は  $X > Y$

<の解釈は次の二通り： <線分上で超える> と <上下に重なる>

(6) Arlington, Potomac River, Georgetown は地名である

動詞 be は存在ひいては位置を表す

*over* の意味が<超える>であれば、この文は3つの地名の位置関係を示すものとして整合する

上の議論は、下の(7)-(9)でサポートされる。(7)-(9)は、<反対側>義として、T & Eがあげている例文である。

(7) The old town lies over the bridge. (4.22)

(8) The mansion is situated over that wall. (4.23)

## (9) John lives over the hill. (4.24)

これらの例で、動詞がそれぞれ *lie*, *be situated*, *live* と位置を表すものであることは非常に興味深い。つまり、これは我々の解釈 (6) を補強するものであると言える。

## 2.2 &lt;上方超過 (超過 I) &gt;義

(10)(11)は、T & E が<上方超過 (超過 I) >義の例としてあげているものである。

(10) The arrow flew over the target and landed in the woods.(4.25)

(11) Your article is over the page limit.(4.27)

T & E によれば、(10)は軌道を持つ運動を表しており、トラジェクターの動きはランドマークの上方を越えている。原図形に一致するこのような動きが概念化され、<上方超過 (超過 I) >義が生まれるとしている。さて、これが独立義であることを示すものとしてT & E は(11)をあげ、「この意義が独立義である証拠は、文脈からこの意義を導き出すことができない (p.83)」(11)のような文から得られると述べている。

そして、図3をこの独立義のイメージスキーマとして提示する。



FIGURE 3: Above-and-beyond or Excess I Sense

(T & E 2003: 84)

それに対して、(11)に対する加藤・花崎 (2006) の分析は(12)であるが、この独立義においても、我々の分析の方が、少なくとも以下の2点において妥当性があると言えよう。

(12) article は文字数・ページ数のあるものである

*over* の意味は<超える>であり、*article* のページ数が *page limit* を超えている  
ということはこの文は言っている

我々の分析が正しいと主張する第1点目の理由としては、(12)の説明の方が、(11)に対する上述の説明より、我々もっている直感にはるかに近いということがあげられよう。つまり、制限を超えているという意義に対する説明を、<上方超過>とするより、<超える>という方が我々の心的表象に近いであろう。やはり、ここで間違っているものは、T & E の原図形の設定であり、そこから出てくる<上方超過>という捉え方であるのは明白であろう。

第2に、T & E のこの独立義に対する説明の中で、トラジェクターとランドマークの設定が矛盾しており、彼女らの説明は、むしろ、我々の分析をサポートするものであるという事実があげられる。T & E は(13)をこの独立義の例としてあげ、それを(14)のように説明する。  
(下線部は筆者)

- (13) Most students wrote over the word limit in order to provide sufficient detail. (4.28)
- (14) この文では論文に対する語数制限がランドマークであり、それを執筆する学生がトラジェクターとして解釈される。…この文における *over* の使用は、それが<超過>義の手掛かりとなっていると理解した場合にのみ、すなわち論文を書くのに用いた単語の数が許容された単語数を超過していると理解される場合にのみ、意味をなすものとなる。(p.84)」

(14)の下線部は我々の(12)と実質的に同じことを言っている。ここで興味深いのは、T&Eも(13)の解釈において(14)の下線部を提示しておきながら、トラジェクターとしては「執筆する学生」を設定していることである。このことは、ごく控えめに言っても、T&Eの、そしておそらくいわゆる認知意味論的道具立てであるトラジェクターとランドマークというセットが、前置詞の意味論では使い物にならないことを示している。と言うのは、T&E自身も超過するものが単語数であることを示しておきながら、その意味表示であるT&Eの図3においては、超過するものが学生であることになっているからである。

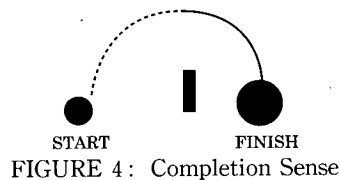
それに対して、我々の意味表示である「 $X > Y$ 」は、認知意味論で言うトラジェクター・ランドマークという道具立てとは別物であり、よってそのような問題は生じない。

### 2.3 <完了>義

この独立義の例として、T&Eは以下の例文をあげる。

- (15) The cat's jump is over. (4.29)
- (16) The film/game/play is over. (4.30)

T&Eは、「<完了>という意味成分はトラジェクターの空間的位置が過程の一側面を表すものとして再分析された結果として生じる (p.85)」としている。つまり、(15)のように、(2a-d)の軌跡を使って新しい意味が概念化され、一つの独立義として(16)のように、軌跡がない、つまり原図形からは導き出せない意義が固定するとしたのである。そして、図4がこの独立義のイメージであるとしている。



(T&E 2003: 84)

ここでのT&Eの議論は、上の2つの独立義で見えてきた空間的意味を中心としていることからくる誤謬だけでなく、非常に重要な事実誤認が見られる。T&Eは、この<完了>義は、副詞的であるとするのである。

T&Eは次のように述べる。

- (17) 「またこの場合、〈完了〉義は純粹に空間関係によって表されているというよりは、過程の一側面として表されている。その結果として、〈完了〉義は副詞的な性質を持つ。すなわちランドマークよりは過程に言及するものとなる。例文(4.29)に見られるように、〈完了〉義はトラジェクターとランドマークの間に空間辞が挟まれる形のTR-LM配置を仲立ちするものではないという事実によって、これは統語法にも反映されている。(p.86)」

しかし〈完了〉義にも前置詞用法はある。

- (18) I am over my cold. (『研究社英和中辞典』)

ここでも、やはり、我々の解釈の方が妥当性があると言えよう。T&Eが〈完了〉義とする(15)(16)(18)への、加藤・花崎(2006)の解釈は(19)である。

- (19) XがYを線分上で超える
- (15') : X = ネコのジャンプというイベントの進行  
Y = ネコのジャンプというイベント  
線分 = 時間軸
- (16') : X = 映画・試合・劇というプロセスの進行  
Y = 映画・試合・劇というプロセス  
線分 = 時間軸
- (18') : X = 私 (の健康状態)  
Y = 風邪, 含意: 風邪は終わるもの  
線分 = 時間軸

(19)の(15)(16)の解釈は、時間軸上でイベントやプロセスが進行し、そのイベントやプロセスの範囲を〈超える〉ということを行っているものである。これらの(15)(16)は副詞用法である。ここでは、統語上の主語はイベントであったりプロセスを持つ概念である。それに対し、前置詞用法である(18)の統語上の主語は、イベントやプロセスではない。この違いが重要であると我々は考える。前置詞用法においては、統語上の主語 (= 意味上の X) がイベントやプロセスではないため、線分上の範囲を定義するものが必要である。それが Y である。一方副詞用法においては、統語上の主語 (= 意味上の X) がイベントやプロセスであるため、線分上の範囲は X 自身が定義可能である。つまり、Y は意味的には線分上の範囲を定義するが、その Y は X の中に含まれているため、独立して現れることがない。前置詞用法・副詞用法の違いは統語的には *over* の目的語が現れているかどうかである。しかしそれは現象的には「現れ」であり、X の種類によって Y が現れるかどうかを決めているという観察の方が重要である。その観察とは、Y を含むような X、つまりイベント・プロセスである X であるかないかによって副詞用法か前置詞用法かが決まる、というものである。

T&E は、*over* の目的語すなわちランドマークがないから副詞用法としているのではな

いかと疑われる。なぜランドマーク (=我々の Y) が必要ないかを考えなければ意味論研究と見なすことはできない。そしてそのような考察は T & E は提示していない。

## 2.4 <移転>義

T & E はこの意味の例として次をあげる。

- (20) Sally turned the keys to the office over to the janitor. (4.31))
- (21) The bank automatically switched the money over to our checking account. (4.32)
- (22) The old government handed its power over (to the newly elected officials). (4.33)

他の意義と同じように、proto-scene に一致する(20)や(21)が概念化され、再分析を経て、一つの固定した意味となり、その証拠に(22)のように、「意義を文脈から導き出すことはできない (p.87)」用法が生まれると、T & E は説明する。そして図 5 をこの独立義のイメージとして提唱する。

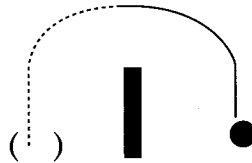


FIGURE 5: Transfer Sense

(T & E 2003: 84)

しかしながら、この分析も、少なくとも以下の 2 点で間違っていると言えよう。

まず第一に、これらの例は、上述の他の独立義と同じように、T & E の proto-scene の建て方に問題があることを示している。T & E は、(20)(21)は、proto-scene より導き出され得るとしているが、この用法はこれらの例のように (ある程度) 空間的なものであっても、すでに原図形からは導き出すことができないものである。と言うのは、この用法には「上」が含まれていないからである。よって、もし、<移転>義があるとすれば、(22)を持ち出すまでもなく、(20)(21)でも T & E の意味での独立義である証拠になる。しかしながら、むしろ、これらの<移転>義は文脈から導き出せるとした方が自然である。(20)–(22)で、動詞が全て「移転」という意味を持つことに注意したい。T & E が「文脈から導き出すことができない」と考えるのは、原図形の設定が間違っているという非常に単純な理由によるものであり、かつその理由にしかよらないものである。

更に、第 2 点目として、そもそも、この<移転>義は独立義と認めるべきものではないであろう。もし over に<移転>という独立義があるならば、例えば「金を渡した」という意味で \*My money was over you と言えないのはなぜだろうか？理由は、(20)–(22)と違って、ここでは動詞が「移転」の意味を持たないからである。

これらの(20)–(22)においても、加藤・花崎 (2006) の分析の方が正当性があると言えるであろう。(20)–(22)では非常に興味深い共通点がある。それは over が副詞用法であることと、(文全体の) ランドマークが to で表示されていることである。我々の解釈は(23)である。

## (23) XがYに重なる

X = 動詞の表す動作

Y = 主語と to 句によって定義される経路

X over Y において X が動詞の動作であり得ることは、例えば *talk over lunch* のような例でどの道認めなければならない。この用法では、Xである「食べる」が、Yである *lunch* の喚起する動作「食べる」と重なる。(20)の場合には、Xは「渡す」である。(20)のYはその動作「渡す」によって移動するものが動く始点 (= 主語) と終点 (= to 句) によって定義される経路である。この理由で、<移転>義用法<sup>2</sup>では to 句が現れる。

(23)のYは単一の句によって表現し得ない概念である。我々は、このことがこの<移転>義用法が統語的には副詞用法である根源的な理由であると主張する。単一の句で表現できないものを *over* が目的語として取ることは当然できない。

また、(23)の解釈では、この用法の *over* は特に意味を文に付け加えていないことになる、という点にも触れておきたい。言ってみれば、*over* は(20)の解釈では経路を強調しているだけである。このことは、(20)–(22)の *over* が省略可能であることによって支持される点に注意されたい。反対に、この *over* が省略可能であることは、T&Eにとっては深刻な問題になるはずである。*Over* が<移転>という意味を持つならば、移転という状況を表す文においてそれが省略可能であるのは不思議なことである。

## 2.5 &lt;時間&gt;義

T&Eの<時間>義の例は次のものである。

(24) The festival will take place over the weekend. (4.34)

(25) Their friendship has remained strong over the years. (4.35)

(26) The boy walked over the hill. (4.36)

<時間>義の成り立ちをT&Eは(26)によって説明しようとする。その説明は(27)である。

(27) しかし、丘などの拡がったランドマークを越えて移動することの重要かつ極めて顕著な帰結は、拡がっていないランドマークを越えて移動する場合に比べてはるかに長い時間が必要になるということである。すなわち、移動の距離が長くなれば、そのぶんだけ移動に必要な時間も長くなる。別の言い方をすれば、距離と持続時間の間には強固な経験的関連付けがあるということになる。(p.88)』

<sup>2</sup> 我々はここで *over* が<移転>という意味を持つと主張しているのではなく、T&Eの<移転>義としてまとめられる一連の事例について述べているだけである。これは本稿の他の用法についても同様である。我々は、*over* の意味は X>Y しか認めていない。ただし>の解釈として<超える>と<重なる>の二つがあることは認めている。



そして、図6をこの独立義のイメージとして提唱する。

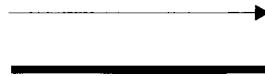


FIGURE 6: Temporal Sense

(T & E 2003: 84)

主語がイベントである(24)では、(26)と同じように時間軸上を移動するトラジェクターを考えることはできるかもしれない。しかし(25)ではそれはできない。あるのは単なる時間経過である。T & Eは(24)と(25)を別物としては考えていないが、このように両者に違いがあるとすれば、(25)はT & Eにとって<時間>が独立義であることの証拠となるはずである。

しかしそのように考えることは、(24)と(25)の重要な共通点を見失うことになる。それは(24') (25')として示すことができる。

(24') festival の実施は持続するものである

(25') remain strong は時間幅を要求する表現である

つまり、(24)(25)はともに *over* 句以外の部分が持続する時間幅を要求しているのである。我々の分析では、(24)(25)の *over* 句は単にそれに応じているだけであり、そして応じることができるのは *over* に<重なり>という意味があるからであり、(27)のような奇妙な理屈も、またT & Eが批判する空間・時間の間のメタファー写像も、そこでは全く必要ない。我々の分析は(28)である。

(28) XがYに重なる

X = 主語と動詞の表す動作・状態

Y = 時間幅表現

なお、(28)でYを「時間幅表現」と設定しているのは重要なポイントになる。<時間>義の *over* は、例えば *three days* のような時間「量」表現とは共起しない。時間幅と時間量の違いと前置詞 *in* の意味論におけるその重要な含意については Kato & Tsuzuki (2006) を参照されたい。(27)のような理屈においては、*over three days* が「三日間」ではなく「三日を超えて」の意味になることがどのように処理されるのかは想像がつかない。我々の分析では、*over three days* は(28)の<重なる>ではなく、<超えて>として扱われる。

## 2.6 <より多く>義

T & Eは(29)をこの独立義の例としてあげ、その例文を(30)のように説明し、図7をこの独立義のイメージとしてあげる。

(29) Jerome found over forty kinds of shells on the beach. (4.51)

(30) 「ランドマーク (forty kinds of shells) はある種の基準ないしは量として解釈され

る。トラジェクターには実際には触れられていないが、この文の解釈からそれは41種類以上の貝殻の種類であることが推定される。(p.97)」



FIGURE 7: More Sense

(T & E 2003: 98)

この意味の T & E の扱いは非常に興味深い。2.2節で見た<上方超過(超過 I)>義の場合と違って、(30)では文全体のトラジェクター・ランドマークのセットとは別に *over* の意味表示としてのセットを設定していることに注意されたい。また(30)では表面上現れていないものをトラジェクターとして設定している。いずれも正しい方向にあると言えよう。そうしない2.2節の記述の方がおかしいのである。我々の分析では、*over* の意味記述を「 $X > Y$ 」という形で表示する。この X と Y が何であるかは、文のトラジェクター・ランドマークのセットとは独立に決定される。

しかし、だからと言って T & E の分析が受け入れられるものでもない。トラジェクター・ランドマークの設定については評価できるものの、T & E はそれを使って proto-scene からの意味派生を考えているのだが、そこに無理があると言わざるを得ない。T & E は、この独立義も原図形である Figure 1 からの派生で考えるのであるが、T & E が正しく指摘するように、「<より多く>という概念と垂直上昇との間に直接的な関連付けはない。(p.97)」そこで、量が増えると高くなる、という経験的関連付けを持ち出してくる。我々は、これは単純に無理だと考える。例えば次の例では、量の増加がうず高くなることを伴わない。

- (31) From my seat in the theatre, I could see over twenty people. (4.52)
- (32) John is over fifty years of age. (4.54)
- (33) He weighs just over 150 pounds. (4.55)

やはり、この独立義の説明についても、我々の説明の方が正しいと思われる。我々のこれらの例に対する分析は非常に単純なものである。

- (34) X が Y を線分上で超える
  - X = 数量を問題にしている対象
  - Y = 数量スケール上の特定の値

スケール上で<超える>という説明の方が、上の例文に対する説明としては、我々のもつ心的表象にあっているとと言えるであろう。

この事例だけに限られるものではないが、T & E が独立義の証拠としているものは、各用法の典型的な用例である。それらが独立義の証拠となる理由は、すでに何度も見たように、

T&Eが「文脈から導かれないから」としているものである。しかしこれも何度も見たように、実際には独立義の証拠とされるものも文脈から十分導かれるものであることをここまでで示してきた。要するに、独立義は文脈から導かれないのではなく、T&Eの原図形から導くことができない、ということである。独立義とされているものはもちろん正常な用法である。そのようなものを原図形から導くことができないということは、原図形の設定が間違っているということに他ならない。T&Eは原図形と個々の独立義を結びつけることのできる事例をもって、それが経験的関連付けと語用論的強化によって独立義として定着したものだという論理を展開する。図式化すると次のようになる。

(35) 原図形 →  $\alpha$  → 独立義

$\alpha$  : 原図形と独立義の橋渡しとなる事例

トラジェクターが物理的に動く場合には、橋渡し役  $\alpha$  を探すのはそれほど困難ではないかもしれない。しかしそのような  $\alpha$  があったとしても、一つの独立義として分類される用例は、独立義という定義上、原図形から直接導くことができないものであることから、 $\alpha$  はその独立義の中で必ず少数派である。この状況は、一つの独立義として分類される用例の中にたまたまそのような橋渡しと解釈される事例がある、と解釈されるべきであろう。T&Eは  $\alpha$  を不当に過大に評価している。

更に、<より多く>義のように、無理に  $\alpha$  を設定しようとする議論が無理が生じてしまうような場合も少なくない。本節だけでなく次節でもそのような独立義を見ていくことになる。要するに、T&Eの設定する原図形 Figure 1 は到底受け入れることはできない。

## 2.7 <支配>義

次の例は<支配>義の用例である。この意義は独立した動機付けを持つ「支配」と「垂直上昇」との経験的関連付けから生じるものであるとし、(37)の考察をT&Eは提示している。図8はT&Eが提示する<支配>義のイメージ図である。

(36) She has a strange power over me. (4.62)

(37) 「人間の歴史を考えれば、そのほとんどの場合、ある人物が他の人物を物理的に支配しているときは、支配者のほうが物理的に高い位置にある形で支配が経験される。肉体的格闘の場合はしばしば勝者もしくは支配者が立ち、上に位置する形で終り、敗者は地面に倒れ、支配者よりも物理的に低い位置で終わる。(…) 要するに、垂直方向に上昇することと支配することとの間には独立に動機付けられた経験的関連付けがあることにより、*over* には<支配>という含意が結び付くことになると考えられるのである。(p.101)」

しかし、(37)のような経験的関連づけで、独立義を説明するのは、やはり無理があるであろう。物理的に上というところに起因しなくては、proto-scene からの派生が考えられなかったと言うことなのであろうが、このことは、他の独立義と同じように、原図形設定の誤りを

指摘していると思われる。

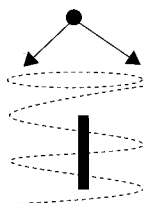


FIGURE8: Control Sense

(T & E 2003: 102)

この独立義においても、我々の分析(38)の方が明らかに正しいと言える。

- (38) XがYに重なる  
 X = <支配>の概念  
 Y = <支配>の及ぶ範囲

(36)では「私」に権力が覆いかぶさっている、という方が我々がもっている直感にふさわしい。

別の可能性としては、ランキング・スケール等の上下関係であるという考え方もあるかもしれない。しかし、この意義をランキング・スケール上の上下で説明するのも難しいというのが我々の意見である。つまり、我々は<支配>義と上下関係は一切関係ないと主張する。<支配>義で重要なのは、垂直方向ではなく、「面を覆うもの」である。少なくとも、T & Eの提示する全データ、(36)と下の3例、においてはそうである。

- (39) Camilla has authority over purchasing (= the act of deciding what will be purchased). (4.65)  
 (40) The Prime Minister holds sway over all the important decisions. (4.66)  
 (41) Personality has more influence over who we marry than physical appearance. (4.67)

(36)とすぐ上の3例では興味深い共通点が見られる。それは、*over*の直前にそれこそ<支配>的な意味内容を持つ名詞（と動詞）が共起していることである。

- (36): have a power (39): have authority (40): hold sway (41): have influence

ここから、この<支配>義においては、支配の意味を持つのは*over*ではなく*power*などの名詞であり、そこでの*over*はその名詞の有効範囲を示していると考えることがすぐ分かる。この独立義に限ったことではないのだが、T & Eが<支配>義としている事例において*over*は実際には支配を表してはいない。<sup>3</sup>

## 2.8 <再起>義

この<再起>義と次の<反復>義では、T&E自身も原図形との関連付けは放棄せざるを得なかったようである。T&Eはここでの(42)(=T&Eの(4.71))について(43)のように述べており、図9をこの独立義のイメージとして提示している。

(42) The fence fell over. (4.71)

(43) 「例文(4.71)では、トラジェクターは最初の(直立した)位置にある柵であり、それは最後の位置すなわち柵が地面に水平に横たわっている状態と区別されている。経験上、私たちはこの柵が90度の弧を描いて倒れる様子を見る。この経験により、概念的な空間関係が(総括的走査によって)抽象化され、時間的に見ると2つの位置にあるものが単一の空間配置として統合される。したがって経験が持つ、時間の流れの中で展開する動的な性質が、静止した空間配置として再分析されるのである。(p.104)」

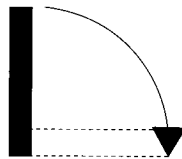


FIGURE 9: Reflexive Sense

(T & E 2003 : 104)

もし<再起>義が原図形に関連付けられるとしたら、それは(43)の言う最初の直立した位置であろう。しかし動きのある意味においては、前置詞は一般的に動きの初期状態を問題にはしない<sup>3</sup>。本稿でこれまで見てきた *over* についても、動きのあるものは、*over* が表示するのはその動きの初期状態ではない。よって、この<再帰>義は、原図形と全く関係ないと言わざるを得ないだろう。我々はT&Eの原図形を強く否定しているのであるから、我々にとっては当然の結果である。

ここでは、この用法を<再帰>と捉えること自体を問題にしたい。T&Eは、直立した状態の柵をトラジェクター、90度回転して倒れた状態の柵をランドマークとしている。このよりの、同一物がトラジェクターとランドマークの両方であるため、<再帰>であるというこ

<sup>3</sup> なお、この<支配>義に関して、T&Eは、*over* と *above* の違いを説明している。

(i) She has a strange power *above* me [Control reading].(4.64)

(ii) 「経験の観点からは、上で述べてように、支配と関連付けられるのは垂直上昇である。これに加えて、支配力を行使できるようにその対象に物理的に近接していることが必要である。(p.102)」

T&Eは、*over* と *above* の違いを、トラジェクターが「手の届く範囲」にあるかないかとしている。T&Eにとっては、(i)のデータは *above* が「ての届かない上」であることの証拠になるということである。しかし我々にとっては、(i)は「*above* は『上方』を示すだけであり、(36)よっての意味での範囲の意味はない」という以上の意味はあり得ない。

<sup>4</sup> *From* については異論があるかもしれない。動きをイベント全体で見ると、確かに *from* は始点を表示する。しかし、*X from Y* は、XがYを出た時に成立するという事に注意されたい。つまり、全体から見た始点も、*from* 自体にとっては初期状態ではないのである。

とである。

ある用法が<再帰>であるということから得られる情報は何であろうか。自分Aが自分Bに移動する、というだけのはずであり、(i) 自分Aが直立であること、(ii) 自分Bが水平であること、(iii) その移動は90度回転であること、という(43)の重要な意味要素は、これが<再帰>の *over* であるということからは導かれなければならないはずである。なおこの点は、Lakoff (1987) の<再帰>義にも当然当てはまる。

T & E は<再帰>義の用法として次のものもあげている。それぞれ動作の初期状態と最終状態が違う点に注目されたい。

- (44) He turned the page over. (4.72)  
 (45) The log rolled over. (4.73)  
 (46) The tree bent over in the wind. (4.74)

(42)とこれらの例で、動作のあり方を決めているのは主語と動詞である。では *over* は何を表示しているのであろうか。我々の分析は次のものである。

- (47) XがYに重なる  
       X = 移動するもの  
       Y = 移動するものと動詞の動作で定義される基準面

(42)では、Xは柵であり、Y「柵が倒れる」という状況と柵のありように関する知識から、地面が基準面になる。よって、柵は地面に<重なる>。(44)では、Xはページであり、Yは「ページをめくる」という状況と本のありように関する知識から、前ページが基準面になる。よって、移動するページが前のページに<重なる>。(45)では、Xは丸太であり、Yは「丸太が転がる」という状況から、地面が基準点となる。また丸太の形状と「転がる」動作から、丸太の接地面と地面が連続的に<重なる>。(46)では、Xは木であり、Yは「木がたわむ」という状況と木の生え方に関する知識から、地面が基準面になる。よってたわむ木が地面と<重なり>、平行に(近く)なる。

## 2.9 <反復>義

T & E は、<反復>義は上の90度回転の<再帰>義4つ分であるとしている。しかし本稿ではそれには触れず、そもそも<反復>義は存在しないという議論を展開したい<sup>5</sup>。T & E の<反復>義の用例は次のものである。下線は我々のものである。

- (48) After the false start, they started the race over. (4.75)  
 (49) After exercising on all the weight machines, Edna began the circuit all over. (4.76)  
 (50) He played the same piano piece over. (4.77)

<sup>5</sup> もっとも、我々の認める *over* の意味は<超える>と<重なる>だけである。ここで我々は、<反復>以外のT & Eの用法は認めると言っているわけではない。

- (5) This keeps happening over and over. (4.78)

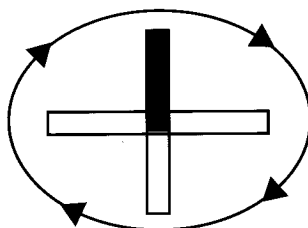


FIGURE 10: Repetition Sense

(T & E 2003: 105)

これらの例では、反復を表しているのは下線部であって *over* ではない。その証拠に、下線部を取り払ってしまうと、これらの文は成立しない。もし *over* 自体に〈反復〉という意味があるならば、下線部なしでも文全体は動作の反復を表すものとして成立しなければならないはずである。よって、〈反復〉義は存在しないと我々は主張する。

では *over* はこれらの文で何を表示しているのだろうか。また下線部がなければ *over* が出てこれなくなるのはなぜなのだろうか。

我々の分析は(52)である。

- (52) X X がYに重なる

X = 動詞とその目的語で定義されるプロセス

Y = 動詞とその目的語で定義されるプロセス

つまり、同じプロセスが〈重なる〉ということである。これは非常に特殊なことであるが、(i) *over* には〈重なる〉という意味があり、(ii) *over* 自体がXとYの一致を保証しているのではなく、(iii) その保証は(48)–(51)の下線部が担当している、と考えることによって理解できる状況である。ここでは *over* は〈重なる〉という意味により二つのプロセスという枠組みを強調するだけであり、その二つがたまたま同じものであることは *over* の貢献でも責任でもない。またその枠組みを *over* が与えているわけでもない。というのは、(48)–(51)の *over* は省略可能だからである。もし *over* 自体が〈反復〉という意味を持っていたり、あるいは二つのプロセスという枠組みに *over* が責任を持っていたとしたら、*over* は省略できるはずはない。この *over* はプロセスの重なりを強調しているだけであり、その点で先に見た2.4節の〈移転〉義と同じである。

### 3. 副詞用法のアルゴリズム

2節では、4つの *over* の副詞用法を見た。我々のそれらに対する分類を下に再掲する。

<完了>義

- (19) XがYを線分上で超える

- (15): X = ネコのジャンプというイベントの進行

Y = ネコのジャンプというイベント

線分 = 時間軸

(16) : X = 映画・試合・劇というプロセスの進行

Y = 映画・試合・劇というプロセス

線分 = 時間軸

(18) : X = 私 (の健康状態)

Y = 風邪, 含意: 風邪は終わるもの

線分 = 時間軸

<移転>義

(23) XがYに重なる

X = 動詞の表す動作

Y = 主語と to 句によって定義される経路

<再帰>義

(47) XがYに重なる

X = 移動するもの

Y = 移動するものと動詞の動作で定義される基準面

<反復>義

(52) XがYに重なる

X = 動詞とその目的語で定義されるプロセス

Y = 動詞とその目的語で定義されるプロセス

これら4つのうち、<完了>義だけは前置詞用法も可能である。(18)は前置詞用法であり、(15)(16)は副詞用法である。2.3節で見たように、副詞用法ではYがイベントやプロセス、つまりそれ自体が範囲であり、Xはその範囲内を進行する。一方、前置詞用法ではXがイベントやプロセスではない。さて、(15)(16)のYは計算によって得られたものであり、実際には *over* の目的語としてYが現れているわけではない。Yは現れる必要がないからである。と言うのは、(15)(16)の主語がイベント・プロセスであり、それがYとして機能するためである。一方前置詞用法では主語がイベント・プロセスではない。そのため、Yを主語が含意することはない。よってYを定義するために、*over* の目的語が必要になる。このように、<完了>義では、Yを主語が含意できるかどうかによって副詞用法になるかどうかが決まる。Yを *over* の目的語して明示する必要があるかどうかということである。

しかし残りの3つの用法では事情が違う。これらのYに共通していることは、Yを一つの句によって定義していないということである。つまりこれらの用法では、Yが複合的に決定されている。複合的に決定されるため、単一の句の形で *over* の目的語位置に置くことができないということである。一方<完了>義では、Yが主語によって含意されるため、*over* の目的語によりYを定義することができない。

両者をまとめると

(53) *Over* の副詞用法のアルゴリズム



*Over* の目的語が現れないのは, *over* の目的語によって Y を定義する必要がないか, あるいは定義できない時である

#### 4. 最後に

本稿では, T & E の *over* の扱いを批判的に検討した。T & E の失敗は, 原図形の設定ミスによるものである。本稿での考察によって, *over* の諸用法の記述には「線分上で<超える>」を認める必要が明らかになったとしたら, 本稿の目的は半ば達したことになる。

#### 参考文献

- Brugman, C. (1981) "Story of Over," master thesis, UC-Berkeley, Berkeley, California.
- Dewell, R. (1994) "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis," *Cognitive Linguistics* 5, pp. 351-80.
- Hanazaki, M. (2005) "Toward a Model of Principled Polysemy," *English Linguistics*. Vol.22 (2) pp.412-442.
- 加藤 鉦三 & 花崎美紀 (2006) 「Over の意味論」2006年10月, 日本英文学会中部支部第59回大会 (三重大学).
- Kato, K. and M. Tsuzuki (2006) "The temporal *IN*," ms. Shinshu University and Chukyo University.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things : What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Tyler, A. and V. Evans (2001) "Reconsidering Prepositional Polysemy Networks: The Case of Over." *Language* 77. pp.724-765.
- (2003) *The Semantics of English Prepositions : Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge U. P.